

難民のために、難民とともに

www.japanforunhcr.org

With You

JAPAN FOR



UNHCR

国連UNHCR協会

国連UNHCR協会ニュースレター「ウイズ・ユー」

2021年10月 | 第46号

特集

「見えない暴力」は、
なぜ見えないのか。

——ジェンダーに基づく暴力を許さない



1 学校に行く途中にさらわれ強制的に結婚させられる恐れから、通学できなくなった15歳の少女

2 ナイジェリアの避難民キャンプで暮らす7歳の少女は、避難民の男性から性暴力を受けた。暴力は避難中の子どもたちのすぐ近くにある

3 薪拾いに行く道のりも、決して安全ではない。暴力の防止、環境にも配慮した代替燃料の提供は課題のひとつ

「見えない暴力」は、なぜ見えないのか。

—ジェンダーに基づく暴力を許さない—

「ジェンダーに基づく暴力(Gender-based Violence)」は、「女性はこうあるべき」「男性はこうあるべき」といった社会的につくられた性別、規範を理由に向けられる暴力(身体的、精神的、性的暴力)です。被害者に深い傷を残し、命を奪うことがあるにもかかわらず、さまざまな要因により表面化しにくいことから、「見えない暴力」ともいわれます。暴力はなぜ起き、被害が見えにくいのか——。UNHCRが難民支援の現場で取り組むジェンダーに基づく暴力の予防・対応プログラムの例から、その理由を探ります。

ジェンダーに基づく暴力はなぜ起きる？

根本的な原因には、社会に根を張るジェンダーの不平等があります。たとえば、男性優位の価値観の中で、地域に残る児童婚などの慣習もジェンダーに基づく暴力のひとつです。「女の子だから」という理由で教育を中断し未来への選択肢を奪われ、嫁いだ先でも虐待を受けるようなケースが多くあり、このリスクは難民の子どもたちの身近なところにもあります。

緊急事態下で起きやすいジェンダーに基づく暴力

紛争や迫害で避難を強いられている人々を守るUNHCRの援助活動の中で、ジェンダーに基づく暴力の防止や被害者の保護は、核となる取り組みのひとつです。暴力は紛争や避難といった緊急事態下で起きやすく、とりわけ女性や女兒への被害が多数を占めます。プライバシーが十分に確保されていない空間で大勢の人と眠らなければならないような避難時の混乱した状況を思い浮かべると、そのリスクが身近に感じられるかもしれません。暴力の防止に努め、リスクのある人々を守り、被害を受けた人々に十分なケアを行っていくことは、命を守る活動にほかなりません。こうしたUNHCRの活動は、世界各地の現場で効果を発揮してきました。ところが、2020年に多くの国でジェンダーに基づく暴力が増加する事態が起きました。今も世界が直面している新型コロナウイルス感染症の流行です。

2020年、ジェンダーに基づく暴力が増加

加害者と一緒に密室に閉じ込められている。ジェンダーに基づく暴力の被害者たちの多くは、今、こうした状況におかれています。新型コロナウイルス感染症の世界的な流行に端を発し、2020年から多くの国で親密なパートナーによる女性と女兒に対する暴力や性的マイノリティの方々に対する暴力のリスクが急増しています。支援の現場でも、2020年末までに27の現場で被害の増加が報告されてお

り、避難生活のストレスや外出制限による生活の困窮、今後の生活への不安などが暴力につながっていると考えられます。UNHCRがとりわけ懸念しているのは、未成年の女子の児童婚や早期妊娠、性的搾取のリスクです。このリスクは、かねてから難民の子どもたちの近くにありましたが、新型コロナの影響による学校の閉鎖や食料不足、生計喪失などの結果として、さらなる増加が懸念されています。

コロナ禍で変革が求められる支援の現場

感染の拡大を予防しながら、いかにジェンダーに基づく暴力のリスクにさらされている人々を守り、必要な支援を届けていくかということは、喫緊の課題です。今、人々を保護する上で必要とされているのは、リモートでの対応やコミュニティに備わっている支援体制の有効活用など、次のような支援の強化です。

- ① **リモートでの支援**
(例: 365日24時間対応のホットラインなど被害者の通報手段の拡大、リモートでのケースマネジメントの強化など)
- ② **暴力の防止やリスクの軽減策、被害者への対応**
(例: 暴力の被害者やリスクにさらされている人々を守る現金の給付支援策など)
- ③ **暴力の予防や被害者のケアにおける難民の女性との協働**
(例: 心理的応急処置に対応する訓練を受けた女性のアウトリーチボランティアの活動など)

レバノン

ジェンダーに基づく暴力に関連する緊急性の高いケースは対面での支援を続ける一方、現金の給付支援、心理社会的カウンセリングはリモートで実施するなど、感染拡大の状況を見極めながら柔軟に対応。

シリア

国内に広くネットワークを持つ女性委員会と連携し、法的支援や医療支援を含む新型コロナ予防策をコミュニティに共有。ジェンダーに基づく暴力の防止において中心的役割を担うコミュニティセンターとも協働。

メキシコ

ジェンダーに基づく暴力のリスクに関する情報キャンペーンを展開。対話アプリ「ワッツアップ」やその他のオンラインプラットフォーム、印刷物など、さまざまな媒体を通して情報を周知。



コロナ禍におけるジェンダーに基づく暴力 UNHCRの取り組み事例

暴力はなぜ見えない？

被害者に口をつぐませる社会

被害が表面化しにくい原因には、被害を訴える公平なメカニズムや頼れる支援制度がないことなどがあり、改善する取り組みが必要です。また、「男の子は強い」というような固定概念や被害者に汚名を着せるといった暴力を受容する社会のあり方も、被害者本人や家族が名乗り出ることを阻む大きな要因です。UNHCRが受けるジェンダーに基づく暴力の通報は女性と女兒が大半ですが、男性や男児への虐待も起きています。被害者は口を閉ざすことが多いため、報告数よりも多くの人が被害を受けていると考えられます。



子どもたちが健やかに成長できるよう、暴力を許さない社会のあり方が問われている



1 南スーダン難民のマリーさんは、自身も暴力を受けた経験から、避難先のケニアでジェンダーに基づく暴力をなくす活動に従事。野菜の栽培は女性たちの生計手段の創出だけでなく、栄養状態の改善にもつながる



2 「仕事があれば、私は今も犠牲者のままだったでしょう」と、コンゴ難民のクリスティヌさん。紛争下で性暴力を受け、夫は家族のもとを去り、子どもを育てるために料理の教師になりました。今は職業訓練を担当し、女性たちの再スタートを手助けしています



3 2014年、イラク北部で誘拐されたヤジディ教徒の女性と少女、推定6000人のうち、逃れてきた1000人以上の身体と心の再生に携わっている避難民の産婦人科医ハサンさん。夜には女性たちが語った話を書き留めます。「歴史のために、記録しなければならぬと感じるのです」

ナイジェリアの事例 「ジェンダーに 基づく暴力を、 絶対に許さない村」 という試み



教室の窓から笑顔を見せてくれた避難民の少女たち。ナイジェリアでは女子の就学率は男子より低い傾向にあり、女性が正規の仕事に就くことが困難な状況にある

ナイジェリア北東部のボルノ州では、過激派組織ボコ・ハラムによる深刻な人道危機と同組織の鎮圧のための軍事行動が10年以上続いてきました。国内で避難している女性は約200万人。人道危機の中で女性たちは、暴力のリスクにさらされ続けています。過激派組織に誘拐され、奴隷化された被害者も多くおり、生きて戻ってくる事ができても、被害を本人の過失としてとがめられ、コミュニティで村八分にされたり、再び暴力の被害にあうといったことも起きています。こうした状況下で、差別やジェンダーに基づく暴力の常態化が懸念されています。

このような暴力の背景にあるコミュニティの慣習や態度の変革にアプローチするために行ったのが、「ジェンダーに基づく暴力を、絶対に許さない村」を標榜した避難民コミュニティ主導の取り組みです。変革の鍵となるのは、コミュニティ全体の参加、起きている問題に対する当事者意識、「いかなる暴力も絶対に許さない村」を名乗りブランド化していく意欲を引き出すことです。プロジェクトでは、コミュニティが主体となって取り組みを行えるよう、UNHCRとパートナー団体が訓練を実施。対話を通して、コミュニティが「暴力を許さない村」を称するために果たすべきことを明確にしていきました。弱者の意見が置き去りにされないよう、プロジェクトの中心メンバーは、コミュニティの伝統的なリーダー、宗教的リーダー、事業主、女性、若者、お年寄りなども含め、多様な人材で構成。コミュニティで宣誓式を行った後、ジェンダーに基づく暴力に関する大規模な注意喚起セッションや訪問キャンペーンなどを実施しました。また、コミュニティの対話セッションでは、トレーニングを受けた94人が、5か月間で5000人以上にジェンダーに基づく暴力を予防するメッセージを伝達しました。

積極的な市民の参加が コミュニティを変える

プロジェクトが進行する中で、徐々にコミュニティで見られるようになったのは、暴力の防止に主体的に取り組む姿勢です。リスクの高いエリアの夜間パトロールや薪拾いの際に女性に同伴する護衛団の組織はその一例であり、女性たちが日常的に直面している暴力のリスクや不安をもとに発案された取り組みです。

【コミュニティが策定・実施し、 安全性の向上に貢献した取り組み】

- たとえばトイレなどリスクの高いエリアの夜間パトロール
- 薪拾いに行く際の護衛団の組織
- 支援の配布場所の警備
- 受け入れセンターでの調査、注意喚起
- 障がいを抱える人の保護の強化
- 新型コロナの予防キャンペーンの実施 など



モハメド・ゴニ・インターナショナル・スタジアム避難民キャンプでは、同プロジェクトを通してジェンダーに基づく暴力の問題の認知向上、関連するサービスの改善につながった

暴力はなぜ見えない？

望まれる、男性や男児の取り組みへの参加

ジェンダーに基づく暴力を防止するためには、コミュニティ全体で取り組む姿勢が必要です。このプロジェクトでも、男性の積極的な参加が重要な役割を果たしました。近くで起きている暴力をコミュニティ全体の問題として当事者意識を持ってとらえ、男性や男児も取り組みに参加していくこと。これは、UNHCRがジェンダーに基づく暴力を防止する取り組みの中で、とても大切にしていることです。



避難民キャンプには、暴力の被害を報告しやすいよう、意見箱も設置されている

こうしたコミュニティの主体性と当事者意識は、ジェンダーに基づく暴力を防止する上で不可欠な要素であり、新型コロナウイルス感染症によってさまざまな制約が課された際にも、その力が発揮されました。感染症の流行初期、不確かな情報が混乱を起こしかねない状況の中、コミュニティのメンバーが感染予防に関する正しい情報を地域に提供。また、想定よりもUNHCRの支援を必要とすることなくジェンダーに基づく暴力の認知向上・ディベートセッションなどを実施しプロジェクトをけん引。今日もコミュニティが中心となって取り組みを続け、伝統的な規範によって暴力を許容することのないよう努めています。

ルワンダの事例 生理を理由に、 学ぶことを あきらめない。



放課後に勉強するルワンダ人のアネットさん(左)とブルンジ難民のベラカさん(右)。受け入れコミュニティも決して豊かではないため、「学校で大きなサポートを受けています」と言うアネットさん。受け入れコミュニティを支援することで全体に良い変化が生まれ、難民の生徒と地元生徒の垣根はなくなりやす

教室で机を並べる、難民の少女たちと受け入れコミュニティの少女たち。ルワンダ人のアネットさんとブルンジ難民のベラカさんは、クラスでも帰り道でもいつも一緒。そんな彼女たちが少し前まで抱えていたのが、生理をめぐる問題です。「生理になると、キャンプに戻らなければなりません」と、ベラカさんは言います。またこれは、受け入れコミュニティの少女にとっても深刻な問題でした。「支援がなければ、今も朝の授業を欠席せざるを得ないでしょう」というアネットさんの言葉からも、その様子を窺い知ることができます。

ルワンダでは学校にトイレが十分に整っておらず、生理用品を買う余裕のない家庭も多いため、生理になると通学が困難になる女子生徒が多くいます。生理に対する偏見もあり、学校で制服が汚ればからかいの対象にもなるため、生徒が学校から遠ざかる一因になっています。生理を理由に教育の機会が失われているこうした状況は、女性の権利の問題やジェンダーの不平等とも深く関わっています。

学校に行く。当たり前の権利を 誰もが手にできるように

ルワンダの教育省は2018年、生徒が生理中でも快適に通学できるよう、学校内に女子生徒のための安全な

スペースをつくる際の指針を導入。UNHCRとパートナー団体は政府と協働し、同国の15の学校に女子生徒のための部屋を整備しました。その結果、生徒たちはここで必要な時にいつでも生理用品を手に入れ、安全なトイレを使用できるようになり、就学率にも改善傾向が見られるようになりました。

【女子生徒のための安全な部屋で 提供されるサービス】

- カギをかけられる安全なスペース
- 生理に関連する必要な支援の提供（生理用品、体調不良の際に休めるベッド、カウンセリングスペースの用意）
- 保健師のような人材による対応 など



女子生徒のための安全な部屋で過ごす生徒たち。この場所は少女たちがジェンダーに基づく暴力に関する知識を得る場所としても機能している

欠席日数 50日/年

世界銀行の統計によると、ルワンダでは初潮を迎えた少女の少なくとも20%が、生理用品がないことや生理に関連する理由で学校を欠席し、1年で最大50日欠席している生徒がいることも報告されています。生理が障壁となって、女子の中退率や欠席率が高くなり、教育格差が生まれています。

暴力はなぜ見えない？

生理をめぐる迷信や悪質な慣習

生理について話してはいけないという国はいまだに多くあります。生理中は「穢れた存在」である、外出してはいけないなど、生理をめぐる迷信が流布し悪質な慣習が残る地域もあり、教育をはじめ女性や女児のさまざまな行動が制限されています。こうした社会に根を張る偏見は、ジェンダーに基づく暴力の原因のひとつです。生理に対する認識を問い直し、話題にしたり、必要な時に声に出して助けを求めたりできるような環境づくりが必要とされています。



「私たちの主な仕事は、子どもたちをよく見ること。彼らのためにここにいて、彼らの声に耳を澄ますことです」と、マイエさん。かつてホームにいたジェシカさんは、マイエさんの献身をこう振り返ります。「彼女は私たちの声に本当に耳を傾けてくれ、その対応も特別なものでした」

「性暴力は夢を見る力を破壊します。子どもたちの笑顔を奪い、痛みと苦痛、不安でいっぱいになります」とマイエリン・ベルガラ・ペレスさん(以下マイエさん)。

コロンビア北部、ベネズエラと国境を接するラ・グアヒーラの県都リオアチャは、隣国から逃れてきた子どもへの性暴力が急増している地域です。マイエさんはここで、子どもたちを守るために活動を続けています。23歳の時に、財団法人レナセールの子どもの保護するホームの夜間教師としてキャリアをスタートした彼女は、人生の多くの時間を、性暴力を受けた子どもたちが精神的に回復するプロセスに注ぎました。マイエさんは夜間教師を始めた頃をこう振り返ります。

「ある子は言いました、『あなたには対応できない』と。ほかの子も『あなたとは絶対に話さない』と言いました。私を追い出し戻らせないようにするための厳しい反応でした」。

しかしマイエさんは、その言葉に子どもたちとの絆を見出します。

「攻撃性の奥に潜む痛みがわかり、その苦しんでいる魂を見たことが彼らと私をつないだのだと思います。私は子どもたちのリハビリのプロセスの一部になりたいのです」。

現在マイエさんは、同団体が新しく設立した、性暴力の生存者たちをケアするホームの代表を務めています。ホームのスタッフは売春地帯に向き、大変弱い立場におかれた数百人もの難民や移民の子どもたちを見つけてきました。憎しみ、恨み、憤り、反感、嫌悪感、罪悪感。こうした感情を

抱えている子どもたちは、ホームで心理学者や教師、スポーツインストラクター、ソーシャルワーカー、弁護士などの専門家の助けを得ることができます。個人セラピー、グループセッション、教育的アクティビティが詰まった一日は、子どもたちに秩序と枠組みをもたらし、トラウマを乗り越える時間と精神的な余裕を与えます。

そうして子どもたちは、夢を見る力をゆっくり取り戻していきます。「性暴力の生存者は、人生を変えることができます」と、マイエさんは、これまでを振り返ります。

「ここにはたくさんさんのサクセスストーリーがあります。シェフ、美容師、看護師、医者、会計士になった子もいます」。

彼女にとって名誉なこと。それは“変化”を目にすること。

「絶え間ない闘いです。でも結果が見える時、継続することがなぜ大切か、理解します。その痛みが笑顔に変わり、ネガティブな感情が夢へと変わるのを目にするのは、かけがえのない喜びです」。

今日も彼女は、いつも通りきつと、枕元に電話を置いて眠りにつきます——。いつでも子どもたちのもとへ、駆け付けるために。



コロナ禍においても、マイエさんの活動は続く。約3000人の移民が暮らすリオアチャ近郊を訪問

2020年ナンセン難民賞を受賞!

弱い立場におかれた子どもや青少年を支え続けた功績が認められ、マイエさんは2020年ナンセン難民賞を受賞しました。同賞は、1954年、難民支援に多大な貢献をした個人または団体を称える目的でUNHCRが創設。マイエさんが所属するコロンビアで30年以上の活動の歴史を持つNGO、財団法人レナセールは、UNHCRとパートナーシップを結び、子どもたちを守る活動で協働しています。

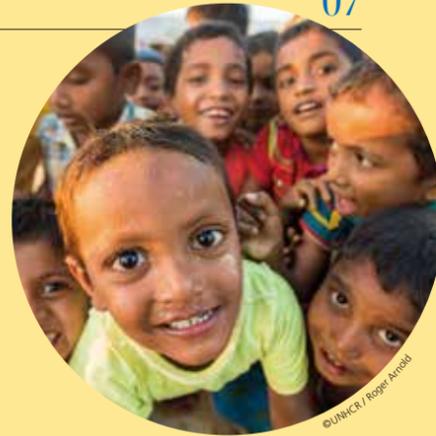


誰一人取り残さない。SDGs持続可能な開発目標 UNHCRがパートナー団体とともに取り組む、苦しい立場におかれた人々をジェンダーに基づく暴力から守る活動は、SDGsの理念の実現に向けた取り組みのひとつです。



あのとき手をさしのべてもらったから、父や母がいて、今、自分がいる。

戦後75年を迎えた昨年、皆様から寄せられた戦争体験を「With You」44号に掲載したところ、大きな反響をいただき、その後さらに多くの体験談が寄せられました。現金の給付支援を特集した「With You」44号へのメッセージと共にご紹介いたします。「あのとき私たちが手をさしのべてもらったから」。そういったお気持ちから、難民の方々へ支援をお寄せくださっていることに、心より感謝申し上げます。



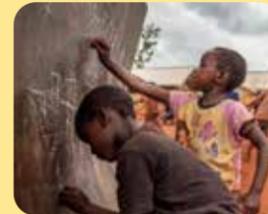
1943年生まれで、食料の乏しい戦争中に生まれた私は、母から苦労話を聞いていました。今不自由なく暮らしている奇跡がありがたい。その気持ちを分け合いたい。

私たちが助けられたという思いを呼び起こされました。大変な時代の記憶はありませんが、脱脂粉乳の味はいまだに覚えております。

<With You44号9ページ掲載、皆様の戦争体験を読んで>

9ページ、身につまされます。戦後生まれでも、同級に小さな子を背負って学校に来ていた女子がいました。また北の辺地のため、冷害で欠食児童もいました。

母が被爆者で、私は戦後3年目に生まれました。幼い頃から毎年夏になると、広島駅から線路づたいに友人と歩いて汽車が出る駅まで帰ったこと、汽車の中で被爆したので体は無傷でしたが、避難する途中地獄を見たとき涙ながらに語ってくれていました。命のつながりをいつも感じています。幼い命が危険にさらされないことがないよう、心より願っています。



支援は必要物資の配布が主なことだと思っていたのですが、支援される側の立場に立った「現金給付」の報告に納得しました。

現金の給付支援の良さ、経済がその土地で回ると、未来のエナジーが見えてとても良いことだと私なりに理解できました。

<With You44号特集:現金の給付支援を読んで>

難民の方の、それまでとこれからを想像することをつい忘れがちになる。今回のニュースレターでは、具体的なこれから、当然に得られるべき生活が伝えられていて、難民の方と私たちは仕方のない別の運命ではないことを改めて認識できました。

困難に直面している人たちの状況に一番関心がありますが、そこから立ち直るためにどう道筋を描いていくか、ということにも関心があり、今回は後者がテーマになっていたので興味深かったです。



表紙の女の子のリュックの模様がキティちゃんであることに、とても複雑な気持ちになりました。日本なら本来、この子と同じ年くらいならもっと楽しく日々を過ごしているのかなと思うと、もっとたくさんの人が、今、世界で起こっている現実を、自分のこととして考える必要があると思います。

<With You44号を読んで>

どの命も生まれて生きる間に多くの困難を伴うが「難民」という生きるためのすべての土台をいきなり暴力によって奪われてしまった人々には、世界のありとあらゆる困難、災難、混乱などがもつれた糸玉のようにからみついていくように思われ、私的なながら生きることの困難な時期を過ごしたことのある自分の痛みなど比べるに及ばないように思われる。しかし、その痛みをほんの少しは知る者として、微力でも力になりたい。

私には小四になる孫がいるのですが、「えっ!」と思うような時事的ワードを話したりします。まだ水分を多く含んでいないスポンジを持つ子どもたちに、どこかへ導くためではなく、今起こっていることを伝え、いっしょに考えることを続けたいです。



皆様の貴重な体験、ご意見をお寄せいただき、どうもありがとうございました。

今号の表紙



カクマ難民キャンプでは、初等教育における女子の就学率の改善と学習の向上を目的としたメンターシッププログラムを実施。笑顔を見せてくれた南スーダン難民のリームさんは、キャンプ内の学校に通う生徒の一人。

数字で見る
レバノンの難民情勢

90万人

レバノンは、世界で9番目に多い90万人を難民として受け入れています。

8人中1人

レバノンに住む人の8人に1人は難民です。同国は、人口1人あたりに対し世界で最も多くの難民を受け入れています。

4600人

2020年、レバノンから第三国定住プログラムで4600人が出国。この数は世界最多でしたが、同国の難民の数と比較すると、定住枠がいかに限られているかわかります。

出典: Global Trends 2020
www.unhcr.org/resettlement.html

WithYou

国連UNHCR協会ニュースレター
「ウィズ・ユー」
第46号 | 2021年10月

発行
特定非営利活動法人 国連UNHCR協会
[国連難民高等弁務官事務所・日本委員会]
〒107-0062
東京都港区南青山6-10-11
ウェスレーセンター3F
Tel. 0120-540-732
Fax. 03-3499-2273
www.japanforunhcr.org

編集
国連UNHCR協会

デザイン
NDCグラフィックス

印刷
株式会社 セッション

©Japan for UNHCR
本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

第 三国定住*担当官としての私のレバノンでの任務は4年目に入りました。着任したばかりの頃の首都ベイルートはどこかヨーロッパに似た雰囲気があり、何不自由ない暮らしをしていましたが、今は停電が続き一日数時間しか電気が使えません。このような状況下で、レバノンの方、難民の方の多くが貧困ライン以下の暮らしを強いられています。

経済危機が続いていた同国では、短期間に物価が跳ね上がり、市民の生活は大打撃を受けてきました。そこに新型コロナウイルスの流行が始まり、2020年3月には全国でロックダウンを実施。人々の生活はさらに追いつめられていきました。そして、あのベイルート

港の爆発事故が起きたのです。責任の所在は明らかにされず、被害を被った地域、生活の糧を失った方々はいまだに苦しい思いをしています。多くの方が海外に活路を見出し国を去りました。でも難民の方々は、国に戻ることも、どこかへ行くこともできません。

私が担当する第三国定住プログラムでも、さまざまな調整が必要になりました。コロナの影響で受け入れ国の状況が刻々と変化中、多くの家族の第三国への定住が延期され、その方たちの保護や現金の給付支援に加え、面接をオンラインで行えるよう環境を整えることも急務でした。第三国定住は、人道の観点から何らかの事情で庇護を求めた国で生きていくことができない人を対象としています。たとえば、ジェンダーに基づく暴力の被害者で今もリスクにさらされている、命をつなぐための必要な医療が受けられないなどの場合です。面接に来る方たちは、貧困の中でさまざまなリスクにさらされ、第三国での定住を希望しています。面接を重ね、皆どれほど苦しい経験をしてきたかということわかっています。それでも、受け入れ数が限られているため、私たちはもっとも厳しい状況にある人を選びなければなりません。誰かを選び、誰かを選ばない、ということは、とても難しいことです。バーンアウトのような症状になることもあります。それでも皆、なんとか息抜きを見つけバランスを取りな

がら任務にあたっています。

時々、面接で出会ったあるシリア人の男性のことを思い出します。紛争下で身に危険が迫りレバノンに逃れてきた彼は、避難先で性的

From
the
Field

難民支援の現場から

24

齋藤千尋 さいとう・ちひろ



勤務するベイルート事務所の前で

マイノリティであることを理由に家族にも命を狙われていました。彼は、面接の際に泣き崩れ、ふとこう言葉を漏らしました。「国連はお墓を建ててくれるのですか?」。死ぬしかない。そう思うほどに彼が追い詰められていることがわかりました。「あなたは服を作る仕事をしていると言ったけれど、どんな洋服を作るのが好きなの?」。私は質問を変えて、彼の職業について尋ねました。すると彼は、「女性のドレスを作るのが好きだ」と答えました。「ど

こかの国に定住することになったら私にドレスを作ってね」と言うと、彼は本当にうれしそうな顔をしました。数分前とは別人のようなその表情を、今も覚えています。未来を思い描くことは希望そのものであり、第三国定住が難民の方たちにとって、もう一度人生を立て直すための重要な選択肢であることを痛感した瞬間でした。

難民の方たちのその後の人生を描く手助けをする、第三国定住担当官という任務の重要性を日々感じています。難民の方と言葉を交わし、教えてもらうことが本当にたくさんあります。避難を強いられている人の数をみると、その膨大さに圧倒されることもあります。しかしその陰には、一人ひとりの人生があります。そういった、私が知りえない過酷な経験をしてきた人との貴重な出会いを大切にしながら、日々第三国定住の任務にあたっています。

プロフィール

2015年、UNHCRセルビア事務所に着任。ヨーロッパ危機の際にバルカン半島を北上し同地に逃れてきた人々の援助活動にあたる。2018年より第三国定住担当官としてUNHCRレバノン・ベイルート事務所勤務。

*第三国定住とは

難民が最初に庇護を求めた国から受け入れに同意した第三国に移動し定住すること。恒久的な解決策の一つで、最初に難民を庇護した国の負担を軽減し、世界の国々で責任を共有することにもつながる。